Thunberg の日本植物誌と Franchet et Savatier の日本植物目錄の中にある竹に就て

室　井　　綽

ツンベルリー氏のFlora Japonicaの出版された1787年とフランチエ及びサヴアチエル両氏の Enumeratio Plantarum Japonicarum の出版された 1879年とは約100年間の隔たりがあるが日本植物学の黎明とも云う可きこの時代における分類学の進歩がこの2書に判然と現れているのは甚だ興味ある事である。

ツンベルリー氏はその師リンネのSpecies Plantarumに倣つて雄蕊、雌蕊の数で分類しているがフ及びサ両氏はも早や立派に今日の分類学の大綱に依つて分類している。例を竹類にとると Th. 氏は〃3雄蕊2雌蕊〃中に Arundo を掲げArundo Bambos Linn. と Arundo Phragmites Linn. の2種を記載して居り前者には種々なあやしげな然し当時としてはおそらく、それ以上を望む事が無理かも知れぬ和名を掲げて居る。〃6雄蕊〃のものは未だ知られて居らなかつた様で、イネ科では僅かにイネのみを〃6雄蕊2雌蕊〃中に掲げている。

然るにフ、及びサ、両氏は堂々と Monocotyledones Gramineaeを掲げ竹類では先ずPhyllostachysに1種、Arundinariaに1種、Bambusa に8種を記載し、更に1872年10月、日本植物目錄に着手してから1876年10月までの4ケ月間に集積した所を附錄として第2巻に加えてある。〃これでミクエル氏のFlora du Japonの最近版（1870）に無い約650種を採錄した〃と述べ協力者中には伊藤圭介氏、小野職愨（モトスグ）氏、弟子 Sava 氏等の日本植物学者の名も挙げて居る。この附錄中に竹類ではマダケとホウライチクとの2属に就いて補記し竹類の検索表まで添えてある。も早やこうなつては立派に現代の分類の門に足を踏み込んで居ると云う可きである。以下竹類を邦釋して見よう。（原文はラテン及び仏文）

Phyllostachys bambusoides Sieb. et Zucc.

クサタケ　ヒガマタケ　コモササ

サ氏は横浜附近に自生しているものをしばしば見たが、開花の種類らしく9年間滞在中花を見た事がなかつた。葉は屢々縁部が大きく黄色帯に隈るのが同一枝中にも全然緑色の葉、即ち隈らないものと混生するのを見る。変種 β. albo-marginata Miq. は保存すべき様に思えぬ。

〔室井云〕 この最後の考えは程なく考えを変えたらしい。附錄にその事を記して居る。今日の学問からするとマダケとクマザサが同一種であるとか変種とか言えば誠におかしなことであるが当時竹と云う非常に珍しい植物を少々観察し標本をつくつた位だから止むを得ない事である。一体竹笹と云うもの程、昔も今も難物であるものは少なかろう。学問の進歩した今日でも往々こんなシーボルト氏式の考えを持つた方に会う事がある位だから当時としては致し方あるまい。

Arundinaria japonica Sieb et Zucc.

Syn. Bambusa metake, ditto

ニガンササ、メタケ、シカクダケ、オナゴダケ、シチク（メダケ）①

ミツケル氏はArundinaria glaucescens と云う名称の下に日本よりヴイテンゾルフの植物園に送つて来たがよく判つて居ない。Arundinaria のもう1種を記載していると附記している。

Bambusa senanensis Fr. et Sav.（タカヤマササ）

マダケ属に似て大型の葉、顕著な種であるがそれより葉がもつと尖つているし、その花序は円錐形である。この花は雄蕊が常に6個である。

Bambusa floribanda Zoll. et Mor.

チスチク　チユツダケ（チユウチク）（ホウオウチク）

本種は葉が甚だ狭く蒼白色を呈し枝は丸いので容易に判る。次種は同様に枝は円柱形であるが更により強大で葉は長さ20cm巾15～20mmになる。

〔室井云〕 和名チンチクは沈竹の意で、この竹の稈には孔が無いか小さいので水中に沈む。それでこう呼ばれる。又チユウチクは虫竹の意でホウライチク属の稈上の芽は巾が広く短く昆虫の伏した姿に似ているのでこの名がある。

Bambusa Chino Fr. et Sav.

シノ、ヤブシノ（アズマネササ）

〔室井云〕 今のアズマネササのことである。種名はシノでキノと呼んではならない。

Bambusa variegata Sieb.

〔室井云〕 チゴササを指している。

Bambusa aurea Sieb.（ホテイチク）

本種は上掲3種と共に稈も枝も円柱形であるが葉には細かく密接した縦条の間に格子目がないため識別し

---

① (　)の中の和名は総て室井が当てたものである。

得る。籜の頂には自分等の所持の標本では硬い短い剛毛がある。この剛毛は早落性らしく籜の大部分なし。

〔室井云〕 以上3種には格子目が無いと記しているが元より誤りである。この剛毛云々は今日の肩毛のことである。

Bambusa pygmaea Miq.

ギンメイチク（オロシマチク）

本種も亦、枝が円柱形（ミツケル氏は茎は稍々円形）であるが枝の先に極めて多数（15〜20）の互生した小形の披針形葉に依つて直ぐに区別が出来る。次に記載した2種については稈にも枝にも溝があるが、或は少くとも枝を着けている面が扁平である。

Bambusa puberula Miq.

メタケ、ハチク（ハチク）

支那の黒竹（パリ植物園にあるBambusa nigra）はPhyllostachys puberula と殆ど異る所がないが、少くとも枝及び葉の裏面中肋の基部に必ず毛のあることで識別が出来る。然し日本ではサバティエ氏はドモンティニイ氏が支那北部より報告した植物の様に年をとつて黒色になるものを見たことがない。

〔室井云〕 ハチクとクロチクとがよく似て同一種であるとは頗る鋭い観察である。然し葉裏の毛云々は勿論当つていない。古いものは往々落ちて無毛となるがこれ等は特徴にはならない。少くとも竹や筐では少々の標品で研究するとこんなことになり易いものである。欧米ではハチクとクロチクとの差異に毛の有無での区別法がよく書かれてあるが日本の植物はやはり日本人の研究者が見てこそ初めて正しい区別や天籟が判るものである。

Bambusa puberula（ハチク）及びその変種 nigra（クロチク）は自分等の信ずる所では今日まで其の栄養器官だけより知られていないから何れの属に属するかと云うことについては断言出来ない。ビダル氏はBulletin de la Société dácclimation 第三册第一册743頁に日本及び中国における竹の用途に就て興味ある記述を発表して居るが、彼はスズダケの名の下に小形で稈が帯黒色或は黒斑があると記して居るが Bambusa puberula var. nigra に甚だ似て居る。

〔室井云〕 スズSasamorpha と黒竹とが同一種、乃至は能く似ていると云うことはとんでもない事で、竹に縁のない西洋学者の言いそうなことである。

Bambusa Kumasaca Zoll.

コマササ、クササ、クマササ、（オカメササ）

附録 p. 605 以下

Phyllostachys Bambusoides（マダケ）に就て

1877年8月に我々は完全に開花したマダケの美しい藪を多数見る機会を得た。この竹の花序はムンロー氏がその著Bamboo p. 36に述べている様に大層変化に富み或は全然葉のないもの或は花序無くその端に2〜3葉をつけた多数の枝の間に混生するもの等で大型円錐花序を形成している。この2つの状態の花序が同一根茎から同時に出て居る。然るに上記ムンロー氏のBambuséesの権威ある記載に反し我々は円錐花序の形成が葉の脱落を齎すと云う様な事を見たことがない。円錐花序には葉のあるものがあり又成長した茎上に花序のある枝が発生する。根茎より直ちに発生した花序は全然無葉で通常すつと大形である。この根茎より直接出る花序は発達が甚だ速やかで筍がのび円錐花序に発達するには僅に20日位である。

マダケ属は開花中雄蕊3個が下垂し花糸にも毛があり、葯より4〜5倍長いのが著しい特徴である。ムンロー氏はこの属中にクロチク、ハチク及びオカメササを包含させているがそれ等の花序は未だ知られて居ない。

又その変種クマササはミツケル氏に従いマダケの変種として置いた。事実葉縁の限とることによつて特徴づけられて居るが今日では我々はむしろ Bambusa senanensis（タカヤマササ）の近縁種と信ずる様になつた。其の事については以下更に詳述するが其の葉底がすつと円形であること、葉脈の形、格子脈、紋、籜、小舌に至る迄全く同一である。

Bambusa senanensis（タカヤマササ）

〃日本竹類中、其の大形の葉によつて知られる顕著な種で全相は Arthrostylidium longiflorum Munro の通りである。変種 β. ontakensis は多分別種とすべきものであろう。

以上述べた様に花序のない枝は黄色に限つた大葉を着けて居る。それで Phyllostachys bambusoides var. β. albomarginata（クマササ）は多分 Bambusa senanensis（タカヤマササ）の近縁種と信じる。

Bambusa nana Roxb.（ホウオウチク）

B. aurea は疑もなく本種の極く近縁種で其の葉も亦格子目を欠いている。然しムンロー氏は葉が全然無毛と記されているが Bambusa nana（ホウワチク）の葉は下面全部脈上に細毛があつて特に蒼白色を呈して居る。

Bambusa Chino（アズマネササ）

全株 B. floribunda（ホウライチク）に似ているがもつと強壮、葉も2〜4倍大きく格子目がある。

ムンロー氏は B. floribunda（ホウライチク）と B. nana（ホウオウチク）とは合一して居られるが我々は

（以下161頁へ）